

2013年3月27日・ふくしま民友 文化面では

永瀬さん「ふくしま記」

『「ふくしま」五十句』で第57回角川俳句賞を受賞した永瀬十悟さん（須賀川市）は、鎮魂とふるさと再生への祈りを込めて句集「橋籠^{はしおぼろ}—ふくしま記」を刊行した。

第1章の『「ふくしま」五十句』は、「忽然^{こつぜん}と消えた日常」に向き合い「戻らない子猫よ放射能降る夜」など震災直後の2カ月を詠んだ。

第2章は、2011年春から12年冬までの2年間の俳句を季節ごとにまとめた。「雨の牡丹^{ぼたん}あふるる色をこぼしけり」など「一步一步前へ、季節の移ろいの中に産土福島の力を感じた」著者の思いが伝わる。

第3章は、震災前に県内で詠んだ句を収録した。

著者はあとがきで、「放射能は五感では捕らえられない不気味なものです。今はここ福島に生きるものに対するいとしさや命のかけがえのなさを俳句にすることで、その不気味さと対峙^{たいじ}しようと考えています」と結んでいる。民友文芸俳句選者の森川光郎さんが「風はらむ丘の新樹ぞ仰がるる」の序句を寄せた。

と紹介されています。